
騎士と戦姫と学園モノ。

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士と戦姫と学園モノ。

【Nコード】

N5364N

【作者名】

三月語

【あらすじ】

冒険者となるべくして、冒険者を育てる学園・クロスティー二学園に入学したヒューマンの少年、リオンIIアリアスト、バハムーンの少女、ノトIIドラグニオン。偶然の二人の出会いによって運命は動き始めた・・・

ととモノ。2小説です！

キャラ紹介（前書き）

初めましての方は初めまして！三月語です！

今回から始まりましたこの小説。

行き先不安ですが・・・

今回はキャラ紹介です。とはいっても、四人だけですが。

キャラ紹介

リオンIIアリアス

ヒューマン男

飄々とした性格。つかみどころがないが、優しい。

他人のことには敏感なくせに、自分のことには果てしなく鈍い。ノトが思いを寄せていることはまるで気づいていない。

悲しいことに猫舌で、猫背。

一人称は『俺』。

ICV..関 俊彦（代表作…『新機動戦記ガンダムW』デュオ・マックスウェル、『機動戦士ガンダムSEED』ラウ・ル・クルーゼ等）

ノトIIドラグニオン

バハムーン女。

バハムーンにしては珍しい、他種族を見下さない子。

優しいのだが、純情で恥ずかしがり。

あることがきっかけでリオンに思いを寄せるが、その相手はまるで

気付かず。本人も彼の前では全く話せなくなってしまいうほど恥ずかしがってしまう、実力発揮できない、など、色々問題を多発してしまう。

実は秀才で、試験は基本全て満点。

ICV…高橋 美佳子（代表作…『魔法少女リリカルなのはStrikerS』キャラ・ル・ルシエ、『モンハン日記 ぎりぎりアイルー村 アイルー危機一髪』ニヤミイ等）

レイナIIウイングヒル

セレスティア女

ノトの貴重な友人。

性格は優しい・・・のだが、時折いたずらをやらかすなどお茶目なところも。

魔法学科ではかなり優秀で、ノトと双肩を張るほど。逆に戦術学科はぼろぼろ。

美人な為、アイドル学科を進められたが、『自分には合わないから』と拒否している。

ICV…日笠 陽子（代表作…『けいおん!』秋山 澪、『いちばんうしろの大魔王』服部 絢子等）

シュナールセストリア

フェルパー女

リオンの幼馴染みで妹的存在。

かなりやんちゃで友愛的。

リオンにはよく突撃↓フライングチョップをのコンボを決める。リオン曰く『日常茶飯事』。

リオンには兄的意識が強く、彼女はただのじゃれあいとは思っていない。

能力は平均的。

ICV・田村 ゆかり（代表作…『魔法少女リリカルなのは』高町なのは、『刀語』とがめ等）

キャラ紹介（後書き）

後二回は説明です。この作品でととモノを知った、という人もいますし・・・

それで、次回は種族説明です。

種族紹介（前書き）

今回は種族紹介です。

全種族分なのですが、以外と短いです。

種族紹介

ヒューマン

所謂人間。標準的な種族。
能力長短が無く、平均的。
寿命は短い、繁殖力に優れ、数も多い。
多種との関係は普通。

エルフ

妖精の血脈を引く種族。
魔術系学科向き。

詩的表現や軟音を好むため、太く硬声のドワーフを嫌う。

ドワーフ

小柄で筋肉質な体躯と、獣に似た容姿を持つ種族。
力に優れ、戦術系学科に多く所属している。
豪快な気質故に、繊細なエルフからは好かれない。

ノーム

土の精霊を祖とする。
力が弱い。
アストラルボディという独特の体質上、実体化には依代が必要。

全ての種族と相性がいい。

クラッズ

小柄な種族。成長しても、ヒューマンの子供ほどの身長しかない。身軽さと器用さから、盗術系学科に属するものが多い。

牧歌的で平和を好むため、殆どの種族からは好まれている。

フェアリー

妖精族。小人に羽をつけたような容姿が特徴。

盗術、魔術系学科向き。

ヒューマンに憧れを抱いている。

同種同士間の仲が悪い。

フェルパー

猫を祖先に持つ種族。

生命力が高く、俊敏性に優れた平均的で万能型。

わりと人見知り。

バハムーン

竜族の血脈を引く種族。

力に優れ、特殊代謝能力のため生命力が強く、戦術系学科に多く所属。

祖先が高次元的存在のためプライドが高く、他種族を見下す態度をとる。（一部例外あり）

ディアボロス

冥界からの血脈を引く種属。

全体的に高い能力を持ち、魔術系学科に向いている。

血統故にノーム以外の種族から敬遠されている。

セレスティア

天使の血脈を引く種族。

信仰心に優れ、魔術系では優秀。

絶対的正義を重んじるため、ディアボロスとは犬猿の仲。

種族紹介（後書き）

次回は簡単な学校紹介と一部の学科紹介、
『ととモノで最も危惧すべきこと』を紹介します。

学園、学科、重要事項について（前書き）

今回は簡単な説明と『死亡』、それに準ずる状態異状についての説明です。

ととモノやったことがある人なら苦しんだことがあるあの状態です。

学科も大きく関わる学科しか紹介しません。後々紹介していきます。

学園、学科、重要事項について

クロスティーニ学園

学長はヴァシユラン。

冒険者を育てるために作られた学園。

所属可能な学科は基本的なもの。

死者などが出るのは当然。

学科（序盤に関わるもののみ）

普通科

全ての種族が所属可能。

戦術・盗術系学科。

習得魔法は基本的なものだが、全ての装備を装備可能。

戦士科

全ての種族が所属可能。

戦術系学科。

攻撃系の特技を習得、スキルにも『二刀流』、『真・二刀龍』など
攻撃補助のことが多い。

魔法使い科

ヒューマン、エルフ、フェアリー、ディアボロス、セレスティアが所属可能。

魔術系学科。

魔法は全属性の殆どが習得可能。

回復・補助はお任せな学科。

重要事項

死亡・灰状態・ロスト

戦闘などにおいて体力が無くなった場合、『死亡』扱いになる。

『死亡』状態からの蘇生は可能だが、失敗すると『灰状態』になる。

『灰状態』も蘇生は可能。だが、失敗した場合、『ロスト』となってしまう。

『ロスト』のまま学園に戻ってしまうと『ロスト』した者は消滅する。

学園、学科、重要事項について（後書き）

今回の紹介で出た『ロスト』、これは私も苦劳しましたよ。確か一人それで消滅しましたし、LV50がロスとした時は焦りました。

次回からストーリー開始です！

といってもプロログですが・・・

E p i s o d e 0 入学と偶然の出会い（前書き）

今回から物語が始まります！

ただ、今回はプロローグ。

Episode 0 入学と偶然の出会い

校庭に桜が咲く季節。

《……では、皆さん。勉強と冒険を両立させ、学園生活を楽しんでください。》

長かった校長の話が終わり、入学式が終わった。

それぞれが講堂から立ち去り、自分のクラスを確認しに向かう。

「ええと、クラス割り……、どこだっけ……」

廊下をパタパタ走る一人の少女。

彼女の名はノートⅡドラグニオン。バハムーンだ。

「あ、見つけた・・・」

ようやくノトはクラス割りの張り出しを見つけた。

だが、まだまだ人は多く、ノトには自分のクラスが見えない。

「あつ、あのっ、わ、私も（ドンッ！）きゃあつ！」

誰かが押し返したのであろう。前の人が押し返されたためにノトは群衆から弾き出され、ノトはそのまま倒れそうになった。

が。

「おっと、危ねえ危ねえ。そんな無理に押しあう必要ねえってのに。」

不意に後ろから助けられる形で肩を掴まれたノト。

（ノト…た、助けて・・・くれた・・・？）

ノトは肩を掴まれた感覚でそう感じた。

「大丈夫か？肩、急に掴んじまってわりいな。」

瞬間。

「・・・(ぽーっ・・・)／／／」

ノトは彼を見て顔を赤くしていた。

「んじゃ、突撃と行きますか！(ガシッ!)」
「ふえっ!?!」

少年はノトの手を掴むと、群衆の中に突っ込んでいった。

「・・・よし、ついた。ここなら自分のクラスがよく見えるだろう？」
「あ・・・うん・・・／／／／」

張り出しの麓まで来た二人。

少年はノトの返事を待たずに自分のクラスを探し出した。

ノトは遅れて名を探す。

「お、あったあった。んじゃ、またな。」

「えっ、あっ、うん・・・／＼／」

少年は先にクラスを見つけたらしく、一足先に群衆から離れていった。

「私は・・・ダンテ先生のクラスだ・・・」

そしてノトも群衆から抜け出た。

（ノト…あうう・・・、まだドキドキしてるよお・・・。男の子に話しかけられたことないし、手なんて握られたの初めてだよお・・・。は、恥ずかしいよお・・・。／／／）

ノトは先程のことを思い返して顔を赤くしていた。

（ノト…でも、イヤじゃなかったなあ・・・。・・・あつ、わ、私、あの人のこと好きになっちゃったのかなあ！？／／／）

などと考えていた。

そして、あることに気づく。

「名前、聞いてないや・・・」

・ この出会いが、彼女の初恋となり、運命を大きく変えたのだった・

E
p
i
s
o
d
e

0

~
F
i
n
~

E p i s o d e 0 入学と偶然の出会い（後書き）

ノトの片思いと出会い。

それがどう進むのか？

次回は時間が少し飛びます。

E p i s o d e 1 再開とグループ分け、学生寮でノト倒れる（前書き）

E p i s o d e 1 です！

ノトの恥ずかしがりな暴走、何気なくリオンの凄まじい能力が発動、
無駄に頑張るレイナの姿が・・・

では、どうぞ！

Episode 1 再開とグループ分け、学生寮でノート倒れる

クラス割がはっきりし、その日の3時間目の休み時間。

「あ、ノート!」

「あ、レイナ……」

自分の席でおとなしく座っていたノートに話しかけたのはノートの唯一の友人のレイナⅡウイングヒル。

「入学試験の結果見たよ? やっぱしノートはすごいや。」

「そんなことないよ……。私は普通だし……」

入学試験の結果を褒めちぎるレイナに謙遜した感じで答えるノート。

その結果は……

全教科満点の首席だったのだ。

「でもまあ、昔からノトを知ってる私はそこまで驚かないけどね。
驚いたのはその次の・・・えっと・・・、あ！思い出した！リオン
|| アリアスって名前だった！その人、ノトに追随するくらいの実力
だった！」

「・・・私は・・・その・・・／／／」

「・・・おやおや？ノト？どうしたのかなあ？顔を赤くしちゃって・
・・・」

「ふえっ！？あ、な、何でもないよ！なんでも・・・／／／」

「なんでもなくないね、絶対！さては恋でもしたのかなあ？」

「っ！！／／／」

凶星。

「・・・その反応から・・・当たりだねえ？」

「はうう・・・／／／」

「・・・さて、相手は誰なのかなあ？」

「そ、それは、その・・・」

レイナはノトに詰め寄る。

「ええっ！！？」

「ちょ、レイナ！こ、声が大きいよ！」

「あ、ごめんごめん。でもノト、名前を聞いてないって・・・」

「・・・名前聞く前に行っちゃったから・・・／／／」

「へえ・・・。でも顔は覚えているんだよね？」

「う、うん・・・／／／」

ノトとレイナが話していたら・・・

「おおっ！学年次席が来たぞ！」

「・・・本当だ！学年次席とは思えない風貌だけど！」

二人の話の渦中に一時期あったその本人、リオンⅡアリアスが来た。

「へえ、あれがリオンⅡアリアス・・・。全然学年次席には見えないね・・・。ねえの・・・あれ？」

「・・・（ぽー・・・）／／／」

ノトがリオンを見て顔を赤くしていた。

「ノト？おーい、ノトー？」

「・・・えっ！？あつ、うえっ！？／／／」

「なーるほどお？まさかノト、リオンに惚れちゃったんだあ。」

「あうあうあうあうあう・・・／／／」

ノトは顔を赤くして俯いてしまった。

「・・・お、あの時の・・・」

リオンもノトに気付いた。

「よっ。一緒のクラスだったみたいだな。」

「あ、やっぱりノトと知り合いなの？」

「あ、それか？あれはただクラス割のところで倒れそうになったのを助けただけだが？」

「へえ。あ、私はレイナ。レイナⅡウイングヒル。それで、この子がノトⅡドラグニオン。」

「あ、俺はさっき騒がれたからわかると思うけど、リオンⅡアリアス。まさか君がドラグニオンだって知らなかった・・・」

「あうあう・・・／／／」

「・・・ノト？」

ポフンッ！！

「はふう・・・／／／」

バタッ！

「ノト！？ちょっと！気絶しないで！？」

「・・・恥ずかしがりなのか？」
「重症の、ね。」

レイナとリオンが二人でノトを保健室へ運び込んだ。

3時間目。

まだ入学したばかりなため、4時間目までは色々とクラスで決めるだけらしい。

「グループを決める。各自で話し合って決めておけ。」

「わり、こいつは俺の幼馴染みのシュナⅡセストリアだ。あくまで妹的な存在だが・・・」

「ども！」

「・・・あ！ごめん、自己紹介忘れてた！私、レイナⅡウイングヒル。」

「・・・んで、ここに今いないけどグループに入るのが・・・ノトⅡドラグニオン。」

「えっ！あの秀才主席の！？」

ノトの名前を聞いた途端、興奮するシュナ。

「すごいじゃんすごいじゃん！上位が3人もいるなんてすごいじゃん！」

「・・・上位が3人？」

「え、だって、そのドラグニオンちゃんでしょ？リオンでしょ？あとレイナちゃん。」

「あー、ノトは『ノトちゃん』の方がいいよ？呼び捨てにしてるのは私とリオンだけだし、あとは名字呼びが多いし・・・」

「そうなの？じゃ、ノトちゃんでもいい？」

「後で確認しときなよ・・・？」

「ほーい。」

シュナは軽く返事する。

「・・・軽いね。」

「これはもともとこういう奴だし。」

「ひどいよりオン！」

頬をぷくつと膨らませて抗議するシュナ。

「・・・そういや、二人は本当にただの幼馴染みの？」

「ただの幼馴染みだが？」

「そだよ？ 兄妹のように育ってきただけで、好きとかそういう関係はないよ？」

あっさりと否定する二人。

「・・・そっか。（よかった）。ノトの初恋がまだ生きてて・・・」

「？」

「どったの？」

「どったわけもないけど・・・あ、とりあえず放課後、ノト見に行く？」

「あ、それいいかも。」

「そうしよそうしよ！」

えらくあっさりとした回答をもらったレイナ。

（レイナ・・・これでやっていけるのか心配になってきた・・・）

陰ながらレイナはそう思っていた。

放課後。

「おいつす！ノト、起きた〜？」

「あ、レイナ……。もう大丈夫だから……」

「……この発表聞いても大丈夫かなあ〜？」

「発……表……？」

レイナの『発表』という言葉に首を傾げるノト。

「はいはい。発表は……。リオンと同じグループになりました！」

「っ！？（○△○）！？」

本当に驚愕の表情を浮かべて驚いているノト。

「ま、その本人は今、食堂で見せちゃった姿のせいでフェルパーの女の子たちに追われてるけど……」

「……姿？」

時は昼。

場所は食堂。

「・・・リオン・・・ものすごい猫背なんだね・・・」

「まあ・・・な。・・・熱っ！」

「猫舌？」

「・・・猫舌なの。リオンは昔からね。」

シュナがそういった瞬間・・・

「・・・ん？」

「あの・・・／／／」

いつの間にか一人のフェルパーがリオンの近くに。

「どした？俺に何か用？」

「あの、とっ、友達になってください!!」
「は・・・?」

突然の申し込みに疑問を浮かべる3人。

「あのさ、まさか、俺の猫背と猫舌に共通個所を見出したとか?」
「あ、えっと、はい・・・」

(レイナ…シュナ、シュナ!)
「ふぁふい? ふえいふぁ? (訳…何? レイナ?)」

レイナは小声でシュナにこの光景について聞いたです。

シュナはシュナで、口に食べ物を入れたまま返事をする。

(レイナ…・・・まず飲み込んでよ・・・)

「・・・んぐっ! ぷはっ!・・・それで何?」

(レイナ…リオンっていつもああなの?)

(シュナ…そだよ? というか、フェルパーだけじゃなくて、フェアリーとかクラッズにも結構人気だよ?)

(レイナ…・・・マジ?)

(シュナ…マジ。)

今なお繰り広げられている『友達になって』宣言はより悪化してい

た。

今に戻る。

「・・・それ、ホント・・・？」

「ホント。」

「えええ・・・」

「大丈夫。友達になりたいってだけで、本当はどうかは知らないし、恋愛感情があっても・・・あ！」

「どうしたの・・・？」

「あ、ああ、ここから先は聞かなかったことにして？」

「・・・いいけど・・・？」

（レイナ..ふいっ。聞かれなくて、言わなくて良かったあ。こ

れ言ったら絶対絶望してたし・・・)

レイナはノートに隠しごとをしていた。

その隠しごととは、『リオンが物凄い自分の事には鈍感で、自分に向けられている好意はまず気付くことはない』ということ。

「今日はもう終わりだから、あとは学生寮の話なんだけど・・・」
「どうしたの？」

「これはまだ話を聞いてないんだよね・・・」

「じゃ、じゃあ、行こう・・・？」

「そうだね。うじうじしてても始まらないし、思いっきりやってかなきゃ！」

「う、うじうじなんか・・・してないもん・・・／＼／＼」

「ほらそこ！勝手に妄想してなんかない！」

「もっ、妄想なんかしてないもん！」

ノトの抗議を無視して、学生寮に向けて歩き始めたレイナと、それを怒りながら追いかけるノト。

学生寮前。

「最後に、学生寮についての説明です。」

前に立っているのは、寮長である。

「この学生寮は、男女兼用なんです。なので、グループで住んでも
らうことになるんですが、一部屋に6個、個室がある部屋なので、
安心して使ってください。」

殆どは『ほおっっ……』と感嘆の言葉を漏らしていたが……

「はふう……」

「の、ノト!? あんたまた気絶するつもりなの!?!」

ノトがまた気絶しかけていた・・・

学生寮。

「ここが私たちの寮なんだけど・・・」

「皆の部屋がまだ決められてないんだね・・・」

真っ先に部屋に来たレイナとノトは、自分たちの所属するグループの部屋を見て感想を言っていた。

「ノトの部屋は・・・あの一番奥の部屋ね。その隣に私がいくから、

多分気絶することはないんだけど・・・」

「で、でも、り、リオン君と一緒になんだよ・・・？は、恥ずかしいよ・・・／＼／＼」

「そんな恥ずかしがってたらだめ！今後は冒険もずっと一緒なんだから！」

「はうっ・・・」

その話を聞いてまたふらついてしまうノト。

「そのためにも！まずはリオンと一緒に住んで！慣れないと！いつまでたっても恥ずかしくなって告白もできないのよ！？」

「あうっ・・・」

またレイナに言葉でパンチを食らうノト。

「・・・でもまあ、この部屋で一緒に過ごすわけだから、多少は慣れるよね。」

レイナがそう締めくくった瞬間・・・

ボタン！！

ノト、また倒れる。

「わーっ！ノトーっ！ごめーん！目を覚ましてー！というかもう気を失ったりしないでよーっ！」

気を失っているノトからは、頭から煙を噴きだしているように見えた・・・

E p i s o d e 1 再開とグループ分け、学生寮でノト倒れる（後書き）

今回、ノトは最後にぶっ倒れてしまいました・・・

次回は初の課外授業、ノトは無事に授業を受け切れるか！？

お楽しみに！

Episode 2 初めての課外授業、またまたノトはぶっ倒れ（前書き）

ととモノEpisode 2です！

今回、ノトはまたぶっ倒れますが、その前に凄いことをやらかして
します！

それが何かは本編で！

Episode 2 初めての課外授業、またまたノトはぶっ倒れ

翌朝、一番鳥が鳴く頃。

「ん……くあ……」

誰よりも早く起きたのはノト。

彼女の場合は最早早起きは『癖』となっていたためである。

「ふああ……（カチャ）」

ノトが自分の個室のドアを開けた瞬間……

「あー、ねみい……（カチャ）」

「はひゃい！？／／／」

リオンが同時にドアを開けた。

ノトは訳の分からない素っ頓狂な声を出してしまう。

「・・・あう・・・あうう・・・（り、リオン君の顔がこんなに近くにいっ！？）／／／」

「ん・・・あ、おはよ。」

「ふにゃあああ・・・／／／」

「お、おい！大丈夫か！？」

もうお決まりの如くノトは気絶してしまった・・・

「まったく、いい加減慣れなつてのに・・・」
「あうう・・・／＼／＼」

リオンから先程の事を聞いてちよつとご立腹なレイナ。

「まったく、あんたつてば昔っからドジで臆病で恥ずかしがりやで怖がりで！そんなんだから友達少ないんだよ！？」
「あうっ、はうっ、ひうっ・・・」

レイナの一言二言がノトにぐさぐさと突き刺さる。

「くすん・・・」
「あっ！ごめん、言い過ぎた！」

レイナの言葉に刺があつた為、泣き出してしまったノト。

「ホントのこと言わなくても・・・くすん。」
「そこ・・・、認めちゃうんだ・・・」

ノトの自虐に呆れたレイナ。

「あ、今日は課外授業だよ？」

「そ、外!？」

「そ。・・・ノト、無茶して魔法使わなくてもいいからね？」

「つ、使うわけないよ・・・。怖いから・・・。」

レイナがノトに魔法を使わせない理由は、彼女が魔法を怖がっているから、というわけだけではない。

彼女は本来、賢者、つまりフェアリーだけしか使えないはずの古の魔法をたった一つだけ習得していることも起因している。

「とにかく、魔法を使わないでリオンにいいところ見せなよ？」

「い、いいとこって・・・、そんな・・・。／／／」

「はいはい、妄想止め!行くよ!？」

「はっ!!!／／／」

ノトを妄想（ノト自身、よくわかってないが）から引き戻して、外に向かうレイナ。

「ま、待ってよー!」

ノトも慌ててレイナを追いかけていった。

ちなみに、二人がいた席からちよつと離れた地点で・・・

「くすん・・・、ひどいよお・・・」

一人のフェアリーの女の子が泣いていた。

理由は言わずもがな、レイナである・・・

場所は変わり、初めの森。

「今日はモンスターとの戦い方を学びます。」

生徒の前に立つ先生がそう話す。

その話の最中、レイナはノトの心配をしていた。

（レイナ・・・いざ戦闘ってなったとき、ノト、ちゃんと戦えるかな・・・？）

その当の本人は・・・

「あうあうあう・・・／／／」

誰が見ても気絶する寸前だった。

「・・・では、先日決めたグループで行動して、最低一回は全員倒してください。」

先生が一言残して締めくくり、グループに分かれていく。

「そんじゃ、俺たちも行くか。．．．ノトの奴、どうしたんだ？」

リオンがレイナに聞く。

当のノトは、レイナに隠れるように、特に、顔を隠すかのようにいた。

「ノト？ ああ、『いつもの』が始まったのよ。」

「『いつもの』？」

シュナが間発入れずに聞き返す。

「恥ずかしがり、臆病、恐がりの3点セット。昔っからのよ。」

レイナが呆れながら説明する。

「はうう．．．／／／」

本人も恥ずかしがって隠れてしまう。

「もうこのことは終わりにしましょ。先行かないと終わんないし。」

「おう。」

「りょーかい！」

レイナの意見に行程の意を示すりオンとシュナ。

だが、ノトは・・・

「・・・／／／」（↑レイナの背中でもじもじしている。理由はリオンがいるから）

「だーっ！あんたはいい加減慣れろって言ってんでしょーが！私の後ろでもじもじすんな！」

「無理だよお・・・／／／／／」

未だにこの調子だった。

3人が向かったのは、初めの森の『木漏れ日に漂う気配』。

「さーて、お、いたいた。おーい！どくガエルが4匹いたぞ！こいつら倒してとっとと帰ろーぜ！？」

リオンがどくガエルを発見し、戦闘に入る。

「・・・まずは私から！いっけえ！！」

シュナが先制攻撃として一匹のどくガエルにダガーで攻撃した。

（どくガエルに3のダメージ！）

「・・・あいつ、もうへろへろなんだけど・・・」

レイナが気付いたことは、先ほどシュナが攻撃したどくガエルが、もうフラフラしていたことである。

「つてことは、あと一撃加えればあいつを倒せるな！んじゃ、ここはノトに・・・」
「・・・ノト？」

先程までいたはずなのに、いつの間にか不在のノト。

その頃のノトは・・・

「あわわわ・・・、こ、こないでよお・・・」

なぜか大量のツリークラッカーに囲まれて動けなくなっていた・・・

「ノトちゃん、いないね・・・」

「どっかで逸れたみたい！ごめん、ちよつと探してくるから！」

「OK。こいつらは俺達で始末しとくぜ！」

「まっかせなさあゝい！」

リオンとシュナにどくガエルを任せ、レイナはノトを探しに向かった。

「だっ、ダガー、ダガーは・・・あっ！」

絶賛囲まれ中のノトは、戦おうとしてダガーを取り出すが、手を滑らせ、ツリークラカーの群れの中にダガーを落としてしまう。

「ど、どうしよう・・・。これじゃ・・・、戦えない・・・」

ノトが完全に危機に陥ったその時。

「フアイア！」

どこからか魔法を唱える声が聞こえ、炎に包まれながら一匹のツリ

ークラッカーが宙を舞った。

「レイナ!!」

「まったく、ホントに心配したんだからね!? 探しに来てみたら何この有様!? 何でツリークラッカーに囲まれてんのよ!?」

「し、知らないよぉ!」

ツリークラッカーはこの二人の話を聞いていたが・・・

呆れていたのか一切攻撃してこなかった。

「ノト、あんた、ダガーは?」

「お、落としちゃった・・・」

「はぁ!?・・・もおっ! あんた、魔法でどうにかしなさい! ホントは使わせたくないんだけど! この際仕方ないじゃない!」

「あうう・・・」

相変わらずレイナにギャーギャー言い包められ、ノトはちよっぴり泣きたくなった。

「んで!? 魔法の構築に何秒必要!?」

「え、えっと、と、とりあえず8秒!」

「わかった! その間は絶対にあんたを守ってやるわ!! 食らえ、サnder!!」

ノトが魔法の構築を始めた瞬間、レイナがツリークラッカーに一人で戦い始めた。

そして、指定の8秒後・・・

「アクア！ノト！できた！？」

レイナはノトに魔法構築が済んだかを確認する。

・・・が。

「・・・」

ノトの顔は青ざめていた。

「の、ノト？」

「れ、レイナ、わ、私、バ、バリデスガンを構築しようとしたら・
・」

「ら？」

「間違えてシヴァ構築しちゃった・・・」

「なんであんたはそこでそれを構築するのよー！？何で！？一体ど
このサイクルで間違えたの！？というか、何でそれが8秒で構築で
きるのよ！？」

「し、知らないよー！！」

ノト、現在シヴァ発動可能。

「もういい！ノト、それ撃って！」

「え、えっと、わ、『我に仇成す者、我が前から、死して滅びよ』
！！」

ノトがシヴァをそのまま唱えた。

前にいたツリークラッカーがシヴァ発動と同時にどんどん死んでいく。

そして、ガラガラ崩れ落ちることもなく、蒸発して消えていった・

「あ、あんた・・・、相変わらず怖いわね・・・」

「あう・・・あう・・・／／／」

レイナが正直な感想を言い、ノトは顔を赤くして俯いてしまう。

その間に、ツリークラッカー達は先程のシヴァを恐れ、逃げて行った。

「ノト、大丈夫？あの古の魔法、結構魔力使うと思うんだけど・・・」

「・・・大丈夫じゃ・・・ない・・・よ・・・。もうフラフラ・・・」

レイナがノトを気遣い支えるが、ノトが本当にフラフラしていることが足から窺えた。

「おーい！無事かー！？」

「ノトちゃん！レイナちゃん！」

二人が戻ろうとした時、リオンとシュナの声が聞こえてきた。

「こっちこっちー！ノトも無事だよー！」

レイナが二人に聞こえるように大声で叫ぶ。

そして、二人が来た。

「よかった、無事で……。それより、どうしたんだ？ここ。すっげええぐれてるし黒いし。」

「ああこれ？ノトがやったの。」

「れ、レイナ！いい、言わないでよお……。／＼／＼」

「へえ？ノトが？すげえじゃん！」

「ホントホント！一人でやったんだ！」

リオンやシュナが褒めちぎり、ノトはより顔を赤くしてしまう。

その瞬間。

ノトは地面にへたり込んでしまう。

レイナの腕をすり抜けて。

「あ、あれ？ノト？大丈夫？」

「しょうがねえな。俺がおぶってやるよ。」

「~~~~~つ!?!?!」

リオンにおぶってもらえることに声も出せないほど驚くノト。

「ノト？　おい、だいじょぶ？」

「にやあああああ！？」

ボタン！！

「あちゃー、またやっちゃった・・・」

「ノトちゃん！？大丈夫！？」

奇声を発し、再びぶっ倒れたノト。

それを見たレイナは顔に手を当てて悩むかのような仕草をとった。

「大丈夫かよ、ノト・・・？」

発端となっていた張本人のリオンは自分のせいだと全く気付いていなかった・・・

Episode 2 ~ fin ~

Episode 2 初めての課外授業、またまたノトはぶっ倒れ（後書き）

今回はEpisode 2に登場した魔法の説明です。

ファイア

小さな火の玉で攻撃。

範囲…敵1体

土属性の敵に効果大。

アクア

小さな水玉を作り攻撃。

範囲…敵1体

火属性の敵に効果大。

サンダー

小さな雷を発生させ攻撃。

範囲…敵1体

水属性の敵に効果大。

シヴァ

敵の命を滅する。

古の魔法。

範囲…敵全体

次回は今回ちょっと出てきたフェアリーの女の子とノトが仲良くなる話です。

ちょっとはあったかい話になるかも？

でもノトがぶっ倒れてしまうことに変わりはありませんが・・・

お楽しみに！

E p i s o d e 3 新しき友達（前書き）

お待ちせしました、E p i s o d e 3です！

ノトに新しい友人が出来ます・・・が、似てる所はあるかも？

Episode 3 新しい友達

「ノトは無茶して気絶しちゃったし、二人はアイテム回収のために別行動しちゃったし・・・」

ノトを部屋に置いて廊下をただ一人歩いていたレイナ。

「ご飯の時間までまだあるしなあ・・・。どうしょ？」

ノトのことはもう放置して、夕飯のことだけを考えていた・・・

「ふあ・・・、あ、あれ？わ、私、どうしたんだろ・・・？」

レイナが立ち去って30分後、ノトは眼を覚ました。

「今・・・何時・・・って！？もうこんな時間！？」

目覚めたら夕飯の時間になっていることに驚きを隠せなくなっていたノトは、パニックに陥ったまま慌てて部屋から出た。

「遅れちゃうようっ！というか、食堂どこだったっけっ！？」

ノトは大慌てで走っていた。

無論、食堂の位置などすっかり忘れてしまっていた。

それが原因で・・・

ドンッ！！

『きゃあっ！！！』

曲がり角で誰かとぶつかってしまった。

「痛た・・・」

「あうう・・・」

ノトとフェアリーの女の子が自分の頭を摩る。

「うゝ・・・あっ！ご、ごめんなさい！焦っていて、気づかなくて・・・」

「あうう・・・、わ、悪いのはこっちなんです！前を見ていなかったから・・・」

「でもでも、注意力不足だった私のせいだし・・・」

「そ、そんなことないです！」

お互いに謝罪合戦になってしまっていた。

謝罪合戦（笑）は暫く続いていた・・・

「・・・も、ノトのバカ・・・。いったいどこで道草してんのよ
」

未だに來ないノトを探しに來たレイナ。

「ったくも・・・へ・・・なんです！って、この声・・・」

突然聞こえた声に気付いたレイナは、その声の許へ向かった。

「ノト! あんた一体・・・って、何してんの？」

レイナが見たもの。

それは・・・

「あなたは何も悪くないんです! 悪いのは私なんです!」
「いえ! ちゃんとしてなかった私が悪いんです!」

ノトとフェアリーの女の子との間で起きていた謝罪合戦だった。

「・・・あんたら・・・、何してんのよ・・・」

「あ、レイナ!？」

「え、あ、こ、これは、その・・・」

レイナの登場にびっくりするかしどもどろになる二人。

「さっき来たばかりよ。それで? 何してたの? こんな廊下のど真ん中で、しかも大声出して・・・」

「そ、それは、その・・・、ぶ、ぶつかっちゃって・・・」

「わ、悪いのは私なのに、この人が『自分のせいだ』と言っていて・・・」

「あーもー、相変わらずグダグダと・・・。あんたもまたグダグダと・・・」

『あうう・・・』

「・・・ってことで、ケンカ両成敗ってことと、私のいらつきの原因解明ってことで・・・」

「え、え!？」

「な、な、な・・・」

「せいっ!!」

ゴチン!!

『いったゝい!!』

「拳骨一髪で勘弁したげる。そんじゃ、みんなで行く? 食堂に。」

「え、あ、うん・・・」

「は、はい・・・」

「・・・この際さ、仲良くやってかない? 友達として、仲間としてさ?」

「そう・・・だね・・・」

「・・・ですね・・・。あ、わ、私は、ユナ||ライトワンドです。」

「私はレイナ||ウインドヒル。んでこっちがノト||ドラグニオン。」

「えっ!? あの主席の!?!」

「主、主席とか関係ないと思う・・・よ?」

「関係ありますよ! これからもよろしくお願いします!」

「うん、こちらこそよろしくね。」

「あ、わ、私も・・・」

こうして、ノトとレイナはユナと友達になった。

おまけ。

「レイナのやつ、おっそいな。早くしないと料理無くなっちゃうぞ？」

「あむあむ・・・ふいつふおふあ、ふあふいふあふあつふあんふあふあいふお? (訳…きつとき、何かあったんじゃないの?)」

「シュナ、口にあるもん飲み込んでから言え! 聞きとりにくい!」
「んぐっ!」

「そら見ろ、慌ててがつつくから・・・ほら水。」

「んっ、んっ・・・ぷはっ! あ、ありがと・・・」

「ったく・・・。何かあったと言いたかったのかもしれないけどさ? あいつらなら大丈夫だろ?」

「だね。・・・けぷっ。」

「おい、女の子が『けぷっ』とか言ってたらだらしないぞ?」

「ふえっ!? え、言ってた!」
／／／

「堂々と『けぷっ』って。」

「はう・・・／／／」

「その癖治せよ?」

「が、頑張る!」

S
t
o
r
y
3
{
f
i
n
}

Episode 3 新しい友達（後書き）

まずはユナの紹介から。

ユナⅡライトワンド

フェアリーの女子。

専攻学科は『賢者』。

ノトと似るところは似るとい子。（すぐに謝ることか、自責にしやすいとか）

イメージ的にはムギ（なので、百合的な状況が発生したら『どんとこい』に）。

CV..竹達 彩奈（剣と魔法と学園モノ。の1作目フェアリー）

次回は外に！だけど・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5364n/>

騎士と戦姫と学園モノ。

2011年10月6日20時30分発行